

長崎大学

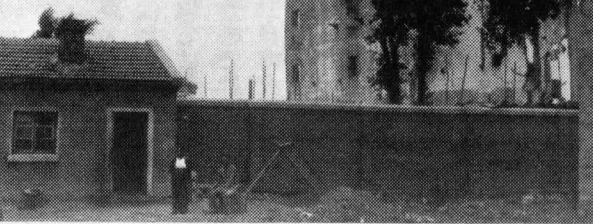
BSL-4の深層

追跡! 生物化学兵器開発、疑念

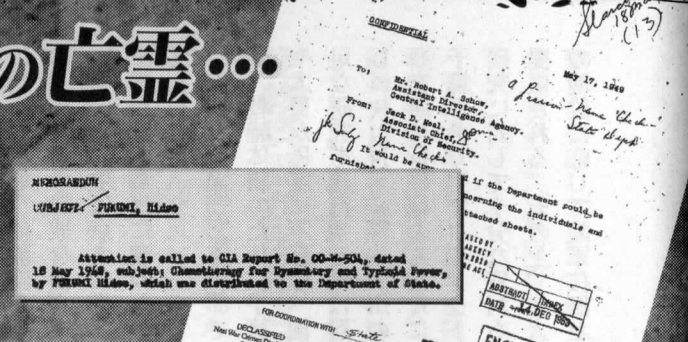


BSL-4施設建設計画を牽引した片峰茂・前長崎大学長

さまよう731部隊の亡霊...



中国ハルビンに残る731部隊の施設



CIAファイルには福見秀雄の名前が記されている

長崎大学で建設工事が始まった「BSL-4」致死性ウイルス研究施設。病原体が漏れ出す危険性だけでなく、この施設は、生物兵器開発に連動するのではという疑念も持たれている。かつて細菌兵器開発のため人体実験まで行った731部隊と長崎大の関係を引きながら、硬骨のジャーナリストが深層に迫る。

ジャーナリスト

斎藤貴男



① BSL-4施設が機能を發揮できる立地
● 安定したインフラ（上下水道、電気、ガスなど）の供給／研究用資材の入手や機器のメンテナンス・修理が容易／坂本には感染症の専門家が150人程度在籍。関連学問領域の専門家も多数／共同実験施設・設備（大型解析装置や動物の繁殖など）の活用
② 施設の安全な運営にとつて最も適切な地
● 地形・天候・大学本部や警察署、消防署等の重要施設との「連絡線」の安定的な維持に不可欠な道路等、必須のインフラの整備
③ 大病院に「第一種感染症病床」がある（略）——
調瀬・学長特別補佐（63）の説明を聞いた。

「離島でいいじゃないかとよく言われますが、難しい。BSL-4は、日本に病気が入ってきた時の守りのピイス。感染症との闘いは時間との闘いだ。風が強い、波が高いから動けないとい

ここで言う「インフラ」には、大学側の基盤や連携体制も含まれる。立派なものだが、坂本キャンパスの好条件は他の医療機関を圧倒している、というほどでもない。安田二郎・感染症共同研究拠点BSL-4施設設置準備室長（熱帯医学研究所新興感染症学分野・大学院医歯薬学総合研究科教授）の話。

「BSL-4施設は、全国の9大学（長崎の他に北海道、東北、東京、慶應義塾、

東京医科歯科、大阪、神戸、九州）によるオールジャパン体制で運営されます。今のところ国内の研究者だけでキャパはいっぱい。海外の方はセキュリティチェックが難しいのと、第一に日本のための施設だからです」

偏狭なナショナリズムとの見方は早計だ。テロの恐怖に怯えている先進諸国は近年、外国人研究者のBSL-4施設への受け入れを忌避したがっており、日本の研究者は、活躍の場が狭まる一方らしい。

それだけの能力があると自負しています」
科学者らしい、だがきわどい発言だ。実際にも片峰氏は、15年9月、住民説明会で同様の話をして、「原爆を乗り越えたのだから、エボラも乗り越えられる」という意味かと非難されたことがある。

長崎大と731部隊の深い関わり
話は12年前に遡る。「高度安全実験（BSL-4）施設を必要とする新興・再興感染症対策に関する調査研究」は2007年9月、内閣府が助成する「科学技術振興調整費」のテーマのひとつに選ばれた。件の9大学と熊本県のワクチンメーカー・化学及血清療法研究所（化血研）によるコンソーシアムが組まれて設置形態その他の具体的な構想が詰められ、最終的に長崎大での立地が決定。15年に製造工程の不正が発覚し、製薬事業から撤退した

化血研は、離脱を余儀なくされている。
長崎大で計画を牽引した片峰茂・前学長（68、ウイルス学）に会った。この件の取材を始めたばかりの、昨年5月のことである。「これは長崎大のミッシェンだと考えています。原爆の焼け野原から再興してきた大学の歩みを、地域の方々にも、ぜひ共有してほしいと思う。僕らはみんな、リスクの中で生きています。今の最大のリスクは感染症。私たちは職責を果たしていきたい。長崎大には

長崎は鎖国下の江戸時代でも唯一、外に開かれた港町だった。ゆえにコレラや天然痘など海外の感染症の侵入経路となり、日本における西洋医学の診療所の発祥の地ともなった。長崎大の前身・長崎医科大に東亜風土病研究所が創設されたのが日中戦争さなかの1942（昭和17）年。戦後は風土病研究所と改称されて五島や吉岐、対馬など長崎の離島に蔓延する風土病の制圧を進め、67年に熱帯医学研究所（熱研）へと改組。ケニアやベトナムにも研究拠点を擁して、熱帯地方の

感染症研究と医療支援で実績を重ねてきた。

片峰氏が「ミッシェン」と胸を張る根拠だ。以上の沿革は、文部科学省に提出する「自己点検・評価報告書」にも明記されてきた。

この1月末の建設着工時には、施設の完成は2021年7月末までとされている。BSL-4施設は長崎大の生き残り戦略の要なのである。

だが歴史には光があれば影もある。大陸の感染症を研究対象とした東亜風土病研究所には731部隊(関東軍防疫給水部本部)をはじめとする細菌戦部隊の関係者が多く出入りしていた。その事実は軍人恩給支給のための「留守名簿」(18年に西山勝夫・滋賀医科大名誉教授が全2冊の「留守名簿 関東軍防疫給水部」を不二出版から復刻)などでも明らかである。「部隊長だった石井四郎を

笑ってる人には来ません。クヨクヨしてる人に来ます」と発言して響(ひびく)を買(か)い、有名になった。現在は福島県立医大の副学長だ。長崎大のBSL-4施設はどうなっていくのか。地域住民は猛反対している。だが大学と政府は彼らの声などものともしない姿勢でいる。長崎市内には無関心を決め込む層や、地域経済の活性化に繋がるとして歓迎する向きも少なくない。設置準備室長の安田氏は、「経済効果云々はまだ考えていません。参入があるにしても、特定の企業なのか、複数がいいのかの検討もこれから」と言った。約8カ月前には、前出の片峰元学長が、「施設の建設には80億〜90億円はかかりますから、民間資金の導入を」と言われている。アフリカをはじめ途上国の研究者も集めて教育できるのが理想です」と語っていた。

出した京大や、東大などの旧帝大はともかく、地方の医科大学では最も関わりが深かったのでは」と指摘するのは、長崎大医学部の出身で、「現代医療を考える会」の代表でもある脳神経外科医の山口研一郎氏(71)だ。また片峰氏の4代前の学長だった故・土山秀夫氏(病理学)は後年、まだ助教だった1968年ごろに、A先生が唐突に語ったという体験談を基に、科学者の自戒を綴っている。A先生は京大の先輩に誘われて満州に渡ったのだとして、

〈折しも内地の医学部では、戦時体制のために予算や人員が極度に不足し、満足な研究を遂行するのは難しい状況だった。満州の研究所に行けばふんだんに予算があり、プロジェクト研究に対して十分な資材も提供される。その上、本人の地位に応じて陸軍技師と

慎重に船出して、いずれ大きく育てたい意向のよう

だ。長崎大は近年、産学協同の事業展開に躍起である。創業ベンチャー設立への動

生物兵器が国策とされる時代が来たら?

そこで調氏に水を向けると、彼はこんなエピソードを教えてくれた。

「富士フィルムの古森重隆会長は長崎の出身で、私も高校の同窓なんです。先日お会いした際、会長は、5年ほど前、ペンタゴンが120億円持ってやってきた」と言われた。同社のインフルエンザ薬「アピガン」が、エボラ出血熱に効きそうだというので、3000人の海兵隊員向けに送ってあげたとか。本当に特効薬にできるか、フランスで共同研究もしてみましたが、人間に効くかどうかまではわからなかったといえます」

なれば兵役に就かなくてもよい……これだけの条件を示されれば、多くの研究者が食指を動かしたのも無理からぬことだったと言えよう。(中略)

福見元学長の名前がCIAファイルに

もともと、長崎大が731部隊との関係で取り沙汰されやすいのは、むしろ戦後も続いていた人脈による。1960年代の風土病研究所長を国立予防衛生研究所の細菌部長と兼務し、80年から84年にかけては学長まで務めた故・福見秀雄氏の存在が大きい。「学童防波堤論」を唱えてインフルエンザワクチンの集団接種を推進した男。戦時中は

学に問いかけるもの」「メデイカル朝日」1995年8月号) 極楽とは内地とは比較にならない好待遇、地獄とは細菌兵器の開発と人体実験の日々。なお土山氏は長崎原爆の被爆者で、日本の核廃絶運動を理論と行動の両面で支えた人物である。私も生前にお会いしたが、実に真摯で誠実な方だった。

東京帝大附属伝染病研究所や陸軍軍医学校防疫研究室にいた彼はまぎれもなく731の関係者だと、幾多の報告が名指ししているが、具体的な活動内容は必ずしも詳らかでない。ただし、と加藤哲郎(一橋大名誉教授(72)、政治学、現代史)が指摘する。731研究の第一人者だ。「米CIAが戦後作成した日本人31人のファイルに、

長崎大には「軍事への寄与を目的とする研究は受け入れの対象としない」との内規がある。防衛省による近年の公募制度にも応募を見合わせるよう学内の研究者に通達済みだ。だから心配はいりません」と、私が取材した誰もが口を揃えた。

それでも、片峰氏は私に話してくれた。 「もしも生物兵器が国策とされる時代が来たら、その時はわからない。でも危険なのはウイルスだけじゃありません。AIだって、何だって同じでしょう。今は将来のリスクよりも、目の前のリスクに目を向けなければならぬ時なんです」

科学とは両刃の剣である。人もしかり。 熱研の元所長を父に持つ片峰氏は前出・土山元学長の教えを受けて「核兵器廃絶研究センター」の設立に尽力し、旧長崎医大で被爆者の救護に活躍した男の孫

細菌戦関係では石井四郎とこの福見だけが記録されていました。米公文書館で確認しています。ただ、彼のファイルは他の日本人と違い、なぜか保存されている情報量が極端に少ない。ですから福見はCIAの手先になっていたのではないかとと思われることもありすが、そうだと断言できないのです。何をしでかすかわからない要注意人物としてマークされていたのかもしれない」

福見氏の愛弟子に故・長瀧重信、孫弟子に山下俊一(67、内分泌学)の元教授たちがいる。いずれもチェルノブイリ原発事故の健康調査で名を馳せたが、山下氏は2011年に福島第1原発事故が発生した際、「これから福島という名前は世界中に知れ渡ります。もう、広島・長崎は負けた。ピンチはチャンス」「放射線の影響は、実はニコニコ

に当たる調氏は、同センターをも担当している。 調氏の祖父とともに活動した人々にも、触れたかったが、もはや紙数が尽きた。土山元学長のエッセイには続きがあった。

(こう見てくると、731部隊に所属した医師たちのほとんどは、平時であれば大学や研究所で医学に打ち込む熱心な学究の徒であり、社会的にも相応の常識を持ち合わせていた人たちであったろう。(中略)果たして彼らの行為は、戦時中という特殊な環境下にあったのだから仕方なかったとする。環境悪論)だけで片付け得るものだろうか。私たちは改めてこの点を深く掘り下げて考えない限り、今後再び同じ過ちを繰り返す可能性が皆無だとは言えないと思う)

先人を嘆かせてはいけません。権力への懐疑は、誰にとっても責務である。